

歴史・案内人は好奇心

ノンフィクション作家　澤地　久枝（さわち　ひさえ）

「憲法」を読みつつ泣かゆ幸福はここに今なお記されいたり

これは「朝日歌壇」（「朝日新聞」の公募欄）選者の一人近藤芳美（こんどうよしみ）さんの『無名者の涙』に引用されている入選歌です。「憲法に描かれているだけのわたしたちの幸福、その憲法の軽蔑（けいべつ）され、憎悪されようとしている日である」と近藤さんは書いています。

なぜ泣けてくるのか？泣かずにいられないのかと考える。そこを出発点として、人は思いがけない広い世界へ出てゆくことになる。たとえば、日本国憲法の全文を読む。この憲法が生まれる以前の明治憲法を読む。二つの憲法を比べてみると、時代、社会、その前提としての政治のありようをたずねることへ関心はひろがるかもしれない。世界中の憲法と比較して、どんな特性が日本国憲法にあるのかを知りたいと考えるかもしれない。「あれ？なにかな？」と思ったら、自分の気持ちを大切にすること。人が生きてゆくときに、欠かすことのできない好奇心は、こういうなんでもないことにひそんでいます。好奇心を道案内にも杖（つえ）にもして、わたしたちは未知の世界へと旅をする。若さとは年齢が左右する以上に、その人の感性のみずみずしさと、好奇心のあり方にかかわっているのだと思います。

「知りたい人間」になったあと、誰（だれ）もが通過するのは、「歴史」です。

昭和という時代がまさに終ろうとしていた一九八八年十二月、七十九歳で亡くなられた文学者大岡昇平（おおおかしょうへい）について、わたしはノートを作ってあります。代表作『レイテ戦記』を中心に、大岡さんが書こうとしたことを辿（たど）ったものです。歴史を自分にひきつけて理解しやすくするために、大岡さんの人生、たとえば軍隊へ召集された日の大岡さんの年齢、その時期の父や母の年齢や生活をかさねて考えています。一人のすぐれた先人に近づいてゆくために、ほかにも方法はあるでしょうが、わが身に即して歴史を考える。つまり同時代人、生活者としての視点をもつのがわたし流です。

レイテ島はフィリピンの島です。第二次世界大戦中、総反撃に出たアメリカ軍の第一目標。日本軍の損耗率（死者の割合）九七パーセント。つまり生き残ることのできた人は、投入された男たちの三パーセント、約二千五百人のみという悲惨をきわめた戦場です。ミンドロ島で米軍に捕えられた大岡さんは、レイテ島の捕虜収容所へ送られ、日本の敗戦をむかえます。マラリアの高熱と衰弱で昏倒（こんとう）し、捕虜となった大岡さん。通りかかった現地住民の「女みたいなその顔には激しい憐憫（れんびん）の情が現われていた。私は生涯でこんなに強い憐憫の表出に接したことはない。私がその時のように惨めな状態にいたことはなかったわけだ」と戦後に書いています。

長編の本格戦記『レイテ戦記』は苦手と思うなら、『ミンドロ島ふたたび』をはじめ、大岡さんが戦争体験を書いた中篇や短篇をぜひ読んでください。三十六歳の兵士は、その青年期、家庭教師が小林秀雄（こばやしひでお）という環境を生き、サラリーマン生活ながら、『スタンダール』の著書や、訳書『スタンダール論』（バルザック）をもつ仏文学者。留守宅には若い妻と、幼い二人の子どもがいました。

戦争が市民生活にとってどういうものであるか、大岡さんのすぐれた文章で、わたしたちは追体験できます。じつに多くのことを教えられます。わたしを大岡文学の世界へ連れていったのはわたしの好奇心です。

まことに暗示的な文章が『レイテ戦記』のしめくくりにあります。大岡さんの静かなメッセージと思います。

「死者の証言は多面的である。レイテ島の土はその声を聞こうとする者には聞える声で、語り続けているのである。」

澤地久枝（さわち ひさえ）

一九三〇年生まれ。一九六三年、「婦人公論」編集次長を最後に中央公論社を退社。著書に『妻たちの二・二六事件』（中央公論社）『昭和史のおんな』（文藝春秋）。近著に『道づれは好奇心』（講談社）などがある。